令和4年度　園評価・関係者評価書

園名	加西市立北条ならの実こども園

1. 教育目標

『健やかな体・豊かな心』　・元気な子　・やさしい子　・素直な子　・ねばりづよい子

2. 本年度の重点目標

『心　動かして　いきいきと遊ぶ子』
～　自ら感じ　関わり　表現できる援助を探る　～

3. 自己評価結果（達成状況）【　A：達成している　B：概ね達成している　C：あまり達成していない　D：達成していない　】

評価の観点	評価項目（取組内容）	取組（達成）の状況	評価	自己評価・改善の方策	学校園自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
園　運　営	○職員の資質向上 ・実践的指導力の向上 ・計画性のある研修の実施 ○園務分掌の適切な機能と責任体制の整備	・担任会議でどの時期にどのような研修をしたいかを話し合い、自主的、意欲的に園内研修を実施できた。PDCAサイクルで業務の見直しや質の向上につながった。 ・開園以来継続して（年間3回）指導していただいている外部講師と共に子どもの学びや育ちを確認し、職員の意欲と自信につながった。 ・公私立園合同の年齢児毎の保育内容研修会や総合教育センターの講座に参加し、学んだことを保育に取り入れた。 ・企画、支援、給食、環境、幼児、乳児の部会ごとに計画的に会議をもち、業務を分担することができた。	A	・外部評価アンケートで「職員の技能に差があると感じた」と指摘があった。場面に応じた子どもへの対応や保護者対応などについても研修の機会をもち、更なる資質向上を目指したい。 ・研修や講座に積極的参加できるような体制づくりをする。 ・部会ごとに業務を分担することで職員の業務軽減につながった。	・外部講師を招いての実技研修等、年に2～3回は計画してほしい。 ・職員の技能に差があることが気になった。
教　育　課　程	○興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活の工夫 ○友達と十分に関わって展開する生活の工夫 ○子どもの主体性を大切にした指導 ○子ども一人一人の発達の特性を踏まえた指導方法の工夫	・遊びを通して主体的、直接的に学べるように、子どもの興味や関心を探りながら、自己選択、試行錯誤ができる環境づくりをした。 ・前半は同年齢児同士で遊び込む経験を積み重ねられるように、後半は異年齢児遊びが充実するように、意図的、計画的に保育実践した。 ・一人一人の子どもの発達の特性や経験の差を職員間で共通理解し、職員が一貫して統一した関わりを行った。	A	・『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を意識した指導計画を作成、実践する中で、より効果的に子どもが主体的、直接的に学べるように環境の構成、再構成をする。 ・同年齢児で遊び込むことで満足し、異年齢児遊びの充実につながった。今後も同年齢児の遊び時間と異年齢児の遊び時間を確保し、学びと育ちを保障する。	・学級だよりや園長だよりから、子どもたちの笑顔や成長ぶりを感じることができる。子どもたちの生活や遊びの様子が文章だけでなく、写真がカラーだったので、分かりやすかった。また、子どもの行動や会話を伝えているのは、その場の様子を想像できて非常に良い。 ・今の状態を維持管理していけるのは、職員間のバトンタッチが上手くできるかどうかである。
子育て支援	○「親と子の育ち合いの場」としての役割や機能の充実 ・未就園児や保護者への園庭開放 ・子育て相談、講座等の開催 ○預かり保育、延長保育の実施	・月2回『どんぐりくらぶ』を実施し、未就園児親子に『こども園』を知って、親しんでもらう機会となった。 ・家庭教育講座は、園での年齢に合わせた教育・保育の意図を理解して、家庭での子どもたちへの関わり方を見直してもらう機会となり、意義を感じた。 ・個別の支援を要する子どもの預かり保育については、職員が交代で1対1で保育を行った。	B	・『どんぐりくらぶ』は、子育て相談機関としての役割を果たしながら、保護者同士がつながる場としても継続実施していく。 ・保護者が子育ての喜びを感じたり、子育てのヒントを得たりできるように家庭教育講座を実施する。 ・預かり保育は年々人数が増え、ゆったりとした雰囲気の中で保育することは極めて難しい。職員の働き方を考慮しながら、最善の方法を模索する。	・先生方のご苦労が目に見える。 ・ゆとりある職場環境を切に望む。 ・『どんぐりくらぶ』で保護者同士がつながる場所となるように、継続実施してほしい。 ・園の行事、参観、オープンスクールなど、保護者の意見を取り入れて行っている。
安全管理 保健管理	○園舎の安全安心確保 ・園舎や遊具の安全点検及び管理 ○職員の安全管理能力の向上 ・危機管理マニュアルの周知徹底と活用 ・防犯、防災訓練の実施 ○交通安全指導の推進 ○健康観察、疾病予防、健康診断の実施	・全職員が安全、安心な園を目指し、点検日だけではなく常時意識するように周知した。 ・職員には未告知で防犯、防災の避難訓練を実施した。 ・AED、食物アレルギー、エピペンなど緊急時の対応研修や救急搬送された園児の実例振り返り研修を、全職員が受講できるように毎回6回に分けて行った。 ・6～10月は熱中症計で暑さ指数を計測し、注意喚起した。	A	・全職員が常に危機管理意識をもち迅速に適切に対応できるように、今後も計画的に研修や訓練を実施し、安全管理能力の向上に努める。	・安全、安心な園となるように今後もお願いしたい。
道徳・人権教育	○子どもの体験や経験を通した、人権意識や道徳性の芽生えの育成 ・命の大切さに触れる体験の重視 ・思いやりの心を育む環境の工夫 ・豊かな感性、様々な気付きを育む環境の工夫	・花や野菜の栽培活動や幼虫や虫、生き物の飼育活動を通して、親しみをもったり、命の大切さに気付く経験ができるようにした。 ・物語や絵本を通して、お話の世界の中で疑似体験をしながら、登場人物に思いを寄せたり、その思いに気付いたりできるような時間をもった。 ・日々の保育の中で話し合いの時間をもち、自分の思いを伝えたり友達の話を聞いたり、一緒に問題解決できるような場を設けた。	B	・様々な花や野菜、幼虫や虫、生き物に出会い、触れたり世話をしたりすることでその面白さや不思議さを感じ、命の大切さにも気付く経験となった。 ・職員自身がモデルであることを意識して教育・保育をする。	・自然豊かな環境のもとで、十分に実践できていると思う。また、子の教育の基本は、先生方の子どもへの接し方、発言、行動そのものがモデルである。
特別支援教育	○一人一人の特性や発達課題に応じた支援 ○専門医療機関、教育機関との連携 ○途切れない支援の推進 ・家庭との連携 ・小学校との連携	・支援部会で子どもの姿の共通理解や、職員の悩みについての意見交換をして、園全体で協力しながら丁寧な支援を行った。 ・年間6回、発達支援アドバイザーを派遣要請し、子どもの様子を見ながら職員の悩みを聞いていただき、具体的なアドバイスを受けることで、一人一人に応じた支援ができた。	A	・職員の迷いや悩みを共有しながら、有効な手立ての情報交換をして、支援部会の充実を目指す。 ・スムーズに進学や進級ができるように、見通しをもって学年を超えての支援の在り方を考えていく。	・すでにされていると思うが、特別な配慮が必要な子どもには、個別の指導計画を保護者と共に作成、共有し、達成評価をすることが大事である。
家庭・地域・ 他校種との連携	○信頼される園づくり ・情報の発信、受信 ・園行事への積極的な参加の推進 ○地域の特性に根ざした園づくり ・教育資源の活用（文化・人材・施設・自然） ○こども園・小学校との連携 ・互いの学びの場となる計画的な交流	・掲示ニュースは内容を伝えるだけでなく、教育・保育の意図を見てもらいやすい提示で理解してもらえるよう心掛け作成した。 ・『節句祭り』の経験から屋台づくり、屋台担ぎの遊びになり、保護者から祭囃子を教えてもらった。住吉神社の神主様のご厚意で『節句祭り』と同じ場所で屋台を担いで練り歩いた。 ・『まちづくり北条』と『小谷城跡保存会』の方々と一緒に城山登りをして、自分たちが住む街を見下ろし、愛着をもつことができた。	A	・ニュースや便りは「伝わりやすい」「分かりやすい」を意識して作成する。 ・地域の伝統行事が遊びになり、自分たちが住む街への愛着につながる経験ができた。 ・『まちづくり北条』と『小谷城跡保存会』の方々のお力をお借りして、今後も恒例行事として城山登りを実施したい。	・子どもは保護者の言動、後ろ姿を一番見て成長する。保護者に向けてのそういった内容の発信が必要ではないか。 ・保護者アンケートからは先生方の頑張りが評価されていない意見が気になる。 ・園児だけでなく関係者も子どもと一緒に過ごせる時間がありがたい。山登りの経験は他ではできない。 ・『北条の宿（しゅく）』を含めて、子どもも保護者も小さいときから学ぶことによって小学校へとつながる。

4. 自己評価方法の適切さについての園関係者評価

・開園5年目で環境が整ってきている。評価の数字を見ると、Aはかなり増えて7項目中5項目に達している。活動、取組の内容を職員も含めて理解し、改善できるところは園評価の保護者の意見を取り入れて改善されている様子が伺える。それがAにつながっている。Bは2項目になっている。BをAにもっていくにはどのような方法があるのか、どのような改善が必要か。今後に期待する。

5. 評価の観点ごとの関係者評価